

文化

「原典会読」世代超え挑む

「史部 書目類 公庫著 録之属 学古堂蔵書目六巻 清 闕名 撰 刊本一冊」

女性研究者が淡々と読み始めた。京都大人文研附属東アジア人文情報学研究中心の書庫。3階までの吹き抜け空間を中心に、



80年目の京大人文研

膨大な蔵書が並ぶ書庫で開かれる「漢籍をみる会」。古い文献を手に取り、静かに議論が交わされる(京都市左京区・京都大人文研分館)



3

「ロ」の字に書架が林立する。窓が多く明るい。書庫中央のわずかなスペースで、5人の研究者が一冊の古い漢籍に顔を寄せた。書物の序文を吟味する。「この文は、どこで切るんだろ」「ここですかね」。静かに議論が重なる。漢字が並ぶだけの原文の読解は、東洋学の基本だ。それでも、ベテランの学者でさえ間違ひもある。とにかく、顔を突き合わせてみんなで読む。これが東洋学研究の原点だ。

井波陵一教授ら有志の

□■メモ

東方文化学院京都研究所 1929年、義和団事件の賠償金をもとに設立。外務省の助成を受け、中国文化を中心とする学術研究が目的だった。30年、スペイン僧院を模した所屋が完成。49年の新・人文研発足後、本館に。現在は分館として活用されている。

現在は東アジア人文情報学研究センターとなった人文研分館。スパニッシュ・ロマネスク様式の建築で知られる(京都市左京区北白川東小倉町)



内藤湖南ら輩出東洋学研究 成果主義、IT化…今、転換期

「漢籍をみる会」は週に一度集まり、約5年続いている。人文研の前身・東方文化学院京都研究所(東方研)の所員が1935年にまとめた漢籍目録と、実際の漢籍を照らし合わせ、異同はないか、中身を検討。全国漢籍データベースに接続する付属資料とし、人文研の

東方研は戦前、考古学や美術など多分野の専門家が参加した雲岡石窟調査をはじめ輝かしい成果を挙げた。収集資料をもとに研究

を深め、内藤湖南や吉川幸次郎、貝塚茂樹らを輩出。世界最高レベルの東洋学の研究機関として名をはせた。

難解な原書に共同で挑む伝統的な学問スタイルは、原典会読と呼ばれ、今も多くの共同研究で受け継がれている。「独りよがりの誤読を排し、討論で衆知を集める」と、吉川はかつて意義を述べた。徹底的に文献を読み込み、手あかのついた史料の中にも、新たな視点で切

り込んできた。会読は長い時間を要する。清代の「雍正硃批諭旨」共同研究は49年から20年に及んだ。途中で班長が亡くなり、3代目の班長で完成した。参加した元助手・小野和子氏は講演で「作った索引カードは12万枚。言葉がどんな文脈に置かれているか、分かる。コンピューターで必要な文字だけ見つけるのとは違う」と会読の意義を強調した。

近年、中国や欧米でも東洋学研究が発展。急激なIT化が進む中、優位を保ってきた人文研の研究も

「永遠の命を保つ漢籍に棲む紙魚」―ある研究者は自らを例える。建物の中心にある書庫の蔵書は増え続け、現在55万冊以上。漢籍の周りで、研究者は何代も代替わりしている。井波教授は言う。「建物の歴史性から、『帝国主義の産物』とやゆする人もいる。資料に恵まれ、この建物で研究する意味は何か、絶えず考える。それを意識しながら研究するのが、私たちの使命です」

毎週水曜掲載。



拓本文字データベースの作業。1文字ずつ情報を打ち込んでいく。すでに147万文字を超えた

しかし、西洋部の今西錦司、梅棹忠夫らがメディアで華々しく活躍する半面、会読を続ける東洋部では地道な作業が続いた。さらに成果を早く求められ、手法も多様化した。60年代から人文研に所属した磯波護・京都大名教授も「『東方

部の研究は古くさい」とよこいわれた」と語る。金文京・人文研教授は「テキストを読むのを体得するだけで10年、20年かかるのに、最近はその力を身につける前に業績を出せといわれる」。

清末の知識人・梁啓超に関する書籍の翻訳、注釈をつける10年がかりの共同研究に参加した石川禎浩准教授は語る。「確かに、すぐ目に見える成果は難しい。今の社会に役立つというより、もう少し遠い世界のためという感覚がある。それは10年先か20年先かも、海の向こうの誰かのためかも知れない」。梁啓超の注釈は中国の学者にも重宝され、近年、研究対象として最も多く扱われている。

「永遠の命を保つ漢籍に棲む紙魚」―ある研究者は自らを例える。建物の中心にある書庫の蔵書は増え続け、現在55万冊以上。漢籍の周りで、研究者は何代も代替わりしている。井波教授は言う。「建物の歴史性から、『帝国主義の産物』とやゆする人もいる。資料に恵まれ、この建物で研究する意味は何か、絶えず考える。それを意識しながら研究するのが、私たちの使命です」